

# 「文と文の間—等位接続詞の語用論的研究—」

加 藤 主 税

## What is There between Sentences?

Chikara KATOH

英語における等位接続詞は、しばしば省略されて、独立した2文として存在する。日本語訳をする場合には、文の前後関係から適切な接続詞を補足しなければ、訳として成立しない。文の前後関係すなわち文脈によって、どのようなメカニズムで、適当な接続詞が選ばれるのかが大問題である。前の文をA、後の文をBとし、AとBがbutで結ばれていると、すると(1)A, but B, (2)—A, but —Bは同一前提条件のもとで成立し、(3) A but—B (4)—A, but Bは(1)(2)とは全く逆の前提条件で成立する。soの場合もbutと同様に分析できる。それ故、AとBの関係とある前提条件から、so, butなどの接続詞がなくても、一定の接続詞を選ぶことが可能であり、反対に接続詞で2文が結ばれている時には、その背後にある前提条件を推測することができる。

### 1. はじめに

よく「行間を読め」と言われるが、行間とは何であるうか。文と文との間に隠されている意味を探ることが本稿の目的である。それは文脈ということにも関係があるし、各種の等位接続詞にも関係する。また英語には、その意味が全く文脈に依存しているような表現が多い。そのような表現を通して、言外(文外)の意味を考えてみたい。

### 2. parataxis と hypotaxis

Onions (1904)によれば、英語の変化はparataxisからhypotaxisへの変化として捉えることができる。ラテン語ではparataxisはco-ordination, hypotaxisはsub-ordinationに対応するが、Onionsはもう少し広い意味で用いている。

- (1) He laughed. She cried.
- (2) I was invited. I went.
- (3) I came. I saw. I conquered.

たとえば(1)(2)(3)が最も典型的なparataxisの形である。そして、それぞれの組の2つの文の関係を明確にするには次の2つの方法がある。その1つは等位接続詞や指示副詞が付加されて、(4)(5)になる。

(4) He laughed  $\left\{ \begin{array}{l} \text{and} \\ \text{but} \end{array} \right\}$  she cried.

(5) I was invited, so I went.

2つ目は(6)(7)のように従属接続詞がつく場合であり、これは既にhypotaxisの結合であると言う。

- (6) If he laughed, she cried.
- (7) I went when I was invited.

Onionsは上記のもの他に関係節、名詞節なども初期は接続詞のないparataxisから発達してきたものと説明している。英語には本来、接続詞は存在しなかったという推測をしている。では接続詞はどこから来たのであろうか。Onionsの言う2文の関係を明確にするため、という説明では不十分であると思われる。

(4)においてandとbutとはどういう意味の差があるだろうか。andは(1)の接続詞がない場合とあまり大差がないが、butの場合は(8)のような特別の意味をもっている。

(8) 彼が笑ったから、彼女も笑うだろうと思っていたが、その予想に反して、彼女は泣いてしまった。

この場合のbutは対照の意味にもとれるが、ここでは逆接の解釈をした。また(5)のsoをbutにした(9)と(5)とを比較してみよう。

(9) I was invited but I went.

(9)は普通の状況では少し不自然である。(10)のような文脈の場合に可能である。

(10) 自分是人から誘われると、いつも行かないが、この時だけは例外だった。

(5)は(11)のような意味になる。

(11) 自分是人から誘われると、いつも行くことにして、この時も行った。

butやsoは文を結合するばかりでなく、このように重要な意味を含んでいる。しかもこれらの接続詞が省略されている場合にも、その文脈から、それがあるものとして解釈してゆくが、そのメカニズムはどのようなものであろうか、本稿では接続詞を通じて、文脈の意味とはどんなものか、その一側面を探ってゆくことを目的とする。

## 3. 文脈的意味

文脈的意味の周辺を探るために、文脈的意味に依存している例を考察してみる。

## 3.1. 入れ読み

毛利(1972)は日英語発想調整法の1つのテクニックとして「入れ読み」を提案している。これは「和訳のさい、何か補って入れるというのは『最上級』を用いたところに、場合によっては『…でさえも』と補うというようなものも含めて、いろいろの場合があるが、ここで例示したいのは、文と文との間のツナギに何か語を補う」(毛利(1972))ということである。

(12) I cannot accept either view. [1] Institutions mould character, and character transforms institutions. [2] Reforms in both must march hand in hand.

(12)において、[1]と[2]の部分には、英文においては何もないが、日本語に訳す時には、[1]は「なぜならば」、[2]は「だから」を補って解釈する。つまり、これら3つの文の意味関係から、適当な接続詞を補って訳さないと、日本語訳としては不十分になる。(12)において、第2番目の文は、第1番目の文の理由になり、さらにこれは第3の文の理由にもなるのである。複数の文があれば、それらの文の間には、必ず何らかの関係があり、無関係な文が続くということはありません。話題を変えたり、段落が切れたりする場合には、その個所のみが、関係が一時中断する。文と文とのツナギの部分(接続詞)は日本語でも、英語でも、よく省略されるが、日本語より、英語の方がその省略が激しいので、日英語発想調整法の1つの課題になるのである。次に文と文との間に接続詞があってもなくてもよいのかということが問題となるが、これはあまり短い文がいくつか続く場合には、接続詞で結んで文自体を長くし、反対に長い文が続く場合には接続詞はよく省かれるというような文体的なことにも関係する。

(13) You needn't worry any longer : the devil is gone. (毛利(1972))

(13)において、ツナギの接続詞が省かれているが、この文脈、つまり第1文と第2文との意味関係から、理由を表わす、because, forなどの接続詞を補うことができる。さらに第2文が第1文の理由になっていることは言外の事実つまり、話者と聴者の既知事項(14)に関係する。

(14) 人は悪魔を恐れるものだ。

この(14)は強いものである、(13)は非文法的になる。

(13)\* You needn't worry any longer though the devil is gone.

一方、the devil をthe angel に変えると(16)のように自然な文になる。

(16) You needn't worry any longer though the angel is gone.

(16)は(17)のような言外の事項に基づく。

(17) 人は天使を待ちのぞんでいる。

## 3.2. コンマ、コロンのことについて

次に接続詞など文のツナギの代用をするピリオド、コロンの、セミコロン、コンマについて考えてみよう。まずピリオドは文の終止を示す符号であるが、文と文との間の符号として考えれば、既に3.1.で述べたように and, but, though, for, because, so, therefore, namely, that is の意味に用いられる。

コンマなどの punctuation に関する研究はあまり見られなく、いまのところ『英語学辞典』の各項がもっとも、網羅的である。これによれば、コロンのには色々な用法があるが、ここで関係のあるものだけを引用すると(18)になる。

(18) 2. 同一構文の節が重なる場合、and, but, for などの接続詞を言外に含める場合に多い。

3. That is, namely と共に、または単に、これらの語句の意を含めて用いる。セミコロンで足りる時に、コロンの用いる時は強調。

次にセミコロンについて、『英語学辞典』から引用してみる。

(19) 1. 接続詞なしに続く2個以上の節間。

To error is human; to forgive, divine.  
She was not only young; she was incredibly lovely.

2. 接続副詞 (so, hence, therefore, however……) で節を結ぶとき。

5. 「即ち」の意の副詞が明示又は含意された節が続く場合。

(19)の2は、接続副詞の意味が明示又は含意された節が続く場合もあり得る。同様にコンマについては(20)である。

(20) 1. 文法的関係を示す。

c. 言外に含蓄された接続詞の代用。

e. 説明的な副詞の類などはコンマをとともなく。これらの語がなくとも、コンマだけでも「すなわち」の意を示す。

ピリオド、コロンの、セミコロン、コンマの順で区切りの重要さがへる。つまり、休止が弱くなるのである。そして(18)(19)(20)のようにこれらのものはすべて、ピリオドと共通の用法をもっている。これらを分類し、まとめると(21)のようになる。

(21) 1. 順接——so, therefore

2. 逆接——however, but, though

3. 理由——for, because

4. 説明——namely, that is

## 5. 付加—and

聞き手は第1文と第2文の意味関係と話し手、聞き手の了解事項とから、②1の1—5のいずれかの意味を決定するのである。明確なツナギの語がある場合に比べて、このようなものは聞き手の負担は大きい。

## 3.3. 分詞構文などの文脈依存性

文の前後関係から意味を決定しなくてはならないものの他の例は分詞構文である。分詞構文には普通次のような意味があるとされている。

- ②2 Tired out after her long walk, she went to bed early. (原因, 理由)
- ②3 Walking along the street, I met my friend. (時)
- ②4 Turning to the right, you will find the office. (条件)
- ②5 Admitting what you say, I still think that you are in the wrong. (讓歩)
- ②6 Walking on tiptoe, I approached the little window. (付帯状況)

②2—②6の例が示しているように、分詞構文のこれらの意味は、前文と後文との意味関係によって決定される。たとえば②2に関して、「人は疲れると早く寝るものだ」という前提条件(了解事項)があり、「疲れた」という文は「早く寝た」という文と因果関係で結びつく。②3において、「道を歩いた」と「友達に会った」は同時性で結びつくのが普通であるが、因果関係で結びつくとも考えられるが、その接続詞に相当するものは省略されており、その意味はコンマ、セミコロンなどの意味のように文脈に依存している。

その他文脈依存的意味をもつ代表的な例はbe+不定詞構文である。

- ②7 We are to meet at six. (予定)
  - ②8 You are to come with me. (義務)
  - ②9 No one was to be seen. (可能)
  - ③0 If it is to be done at all, it must be done well. (仮定)
  - ③1 He was never to see his home again. (運命)
- ②7—③1のような用法があり、その他意図、願望を分類する辞書もある。この場合はコンマ、分詞構文の場合と異なり、文と文との関係からではなく、単一の文中の語句の意味関係から、そのような用法が生ずる。②9③0③1はだいたいその文だけで、上の意味に決定されるが、②7②8は予定、義務、願望、意図のいずれにもなり、その前後の文の文脈、場面によって、あるいは話し手、聞き手の了解事項、前提条件などによって、そのどれかの意味になる。be+不定詞はそれ自身は意味的に中性、つまり無意

味に近く、換言すれば文脈依存性が高いということである。

その意味がもっと強く文脈に依存するのは代名詞(定冠詞を含む)である。文脈あるいは発話の場面の助けがなければ、代名詞は無内容に等しい『英語学辞典』によれば、この場合の依存の仕方は次の3段階に識別される。

## ③2 文脈に依存。

There is a book on my desk. It is a dictionary.

## ③3 特殊的 situation に依存。

What's that ?

## ③4 普遍的 situation に依存。

The sun is larger than the moon.

その他文脈依存性というのは言語に広く作用している性質であり、2つ以上の意味を有する語の意味決定も文脈に依っている。たとえば、spirit という語は、名詞、動詞もあるが、名詞だけに限って、大きく分けても①心、②勇気、③人物、④気分、⑤アルコールなどの意味をもち、その意味決定は、その文内の文脈(その語とどんな語が結合しているか)、それでも決定できない場合には、前後の文やあるいは、その発話状況から、どれか1つに決定される。語のレベル、文のレベル、談話のレベル、発話状況のレベルにおける文脈のどれかによって、特定の意味が選択されるのであり、それらのすべてのレベルの文脈によってもなお、完全に意味が2通り以上とれるということはあまりないように思われる。

## 4. but と so

3で文脈の色々な面を概観してきたが、文脈がいか言語伝達ということに重要であるかを再認識するにいたった。文脈と言っても色々なものがあって漠然としているが、ここでは、もっとも基本的なものとして、文と文とのツナギとして補われる②1の5種の接続つまり、順接、逆接、理由、説明、付加について、いまして詳しく調べてみよう。その5種のうちでも特に基本的なものは、順接と逆接であろう。

順接、逆接とは『広辞苑』によれば③5③6のことである。

③5 順接：前後する甲乙2つの文または文節を接続するしかたで、甲から当然に生ずる順当な事態として乙が成立することを表わすもの。順態接続。

③6 逆接：前後する甲乙2つの文または句における接続のしかたの1で、甲で述べた事実と相反する事態またはそれと一致しない事態が乙において成立することを表わすもの。逆態接続。  
順接の代表的な接続詞は so であり、逆接は but である。

ただし, but は逆接でなく, 単に対照を表わす場合があるが, ここでは逆接の場合のみを問題とする。

(37) He is rich, so he is happy.

(38) He is rich, but he is happy.

(37)と(38)は, 接続詞のみが異なる文であるが, 全く反対の前提条件をもっている。(39)(40)はそれぞれ(37)(38)の前提条件である。

(39) 金持は一般に幸福である。

(40) 金持は一般に不幸である。

(37)が(38)より自然な結合であるのは, (39)が(40)より自然であるということに基づく。A=he is rich, B=he is happy, -A=he is not rich, -B=he is not happy とし, AがBより先に来るものとする(40)-(47)のような組合せが可能である。

(40) A, so B (=37)

(41) -A, so-B

(42) A, so-B

(43) -A, so B

(44) A, but-B

(45) -A, but B

(46) A, but B (=38)

(47) -A, but-B

このうち(39)の前提条件がある時には, (40)(41)(44)(45)が正しく, (42)(43)(46)(47)は非文になり, (40)の前提がある時には, その逆になる。それで, 文Aと文Bがあって, 前提条件があれば, 文Aと文Bのツナギの接続詞soがあるいはbutかが自然に決まる。また反対に, AとBがどんな接続詞で結合してあったかによって, その前提条件が決まるのである。だから接続詞が省略される場合には, 前提条件が決っていなければならないし, 接続詞を使って文を結合する時には, 新しい前提条件を合意することができる。

(48) 彼女は美人だ。みんなに愛されている。

(48)のツナギはどんな接続詞だろうか。このままでは少しあいまいであるが, わざとどちらにも決めないで, 聞き手の判断にまかせる時には, このままで使われる。もっとも中性的で, 暗示的主張のない表現は(49)である。

(49) 彼女は美人でみんなに愛されている。

(49)はまだあいまいである。

(50) 彼女は美人だ。そしてみんなに愛されている。

(50)は情報が付加されただけで, 2文の関係は明示されていない。

(51) 彼女は美人なので, みんなに愛されている。

(52) 彼女は美人だがみんなに愛されている。

(51)(52)は全く反対の前提をもっている。

以上順接と逆接について述べたが, その他のものも, 同様にして考えられる。理由については, 順接と同様に因果関係であるが, 順接の場合は原因・理由が先に来て, 結果があとに来るのに対し, これはその反対である。付加の場合は1つの文にもう1つの文をつけ加えるだけであり, それらの文の間関係はあまりないようである。説明の場合には, 1つの文ともう1つの文の内容が同じであり, 表現が異なるだけである。この場合には相当複雑な前提や知識が必要である。

## 5. 結 び

文と文とのツナギの接続詞は単に2つの文を結合しているだけでなく, その他重要な役割をもつ。その接続詞によって, 話し手の隠された主張を探ることができる。また反対に, 接続詞がない場合, 文は単独で出て来るものでなく, 談話の一部として, あるいは話し手, 聞き手の状況をその背後にもっているもので, その省かれた接続詞を推測することによって, 英文の深い理解が可能である。

## 参 考 文 献

1. C. T. Onions (1904), *An Advanced English Syntax*.
2. Anita Mittwoch (1977), "How to refer to one's own words: speech-act modifying adverbials and the performative analysis", *Journal of Linguistics*.
3. 毛利可信 (1972), 『意味論から見た英文法』
4. 市河三喜編, 『英語学辞典』